# 譲歩節における疑問縮約について*

佐藤元樹

## 1. はじめに

譲歩節における疑問縮約（concessive/unconditional sluicing）は、近年、削除の同一性条件に対して問題を提起する例として取り上げられている。譲歩節における疑問縮約の興味深い特徴は、省略された箇所を復元すると、繋辞文または縮約された分裂文となることである。そのため、以下の例に示すように、省略文が先行文と形態・統語的に同一にならないことが起こりうる。

(1) a. She won't talk to anyone—it doesn't matter who.
b. She won't talk to anyone—it doesn't matter who it is.
c. She won't talk to anyone—it doesn't matter who they are.
d.# She won't talk to anyone—it doesn't matter who she won't talk to.

(Merchant 2001: 175, Barros 2014: 90, Elliot and Murphy 2019: 3)

統語的同一性条件に従わない疑問縮約はいくつか指摘されているが、譲歩節は、疑問縮約の繋辞文派生分析を支持する特有な統語環境であることで知られている。本稿では、譲歩節の節省略が、代名詞主語と繋辞の脱落ではなく、疑問縮約の一種であることを示す。また、その統語派生が繋辞文に限定されないことを論じる。

## 2. 節省略の性質

譲歩節の省略現象が疑問縮約であることは、削除の認可条件と swiping から証左が得られる。疑問縮約は wh 疑問文の形式をしていれば、どのような形式でも省略を許すわけではない。よく知られているように、疑問詞の中でも、whether の直後では節省略は認められない。この疑問縮約の認可条件は、以下の例が示すように、no/not matter の補文にも当てはまる。

(2) a. The players of both teams get money no matter whether they win or lose.
b.* The players of both teams get money no matter whether.
(3) a. The players of both teams get money. It doesn't matter whether they win or lose.
b.* The players of both teams get money. It doesn't matter whether.

節省略が疑問縮約であることを示す第二の根拠は、swiping と呼ばれる疑問縮約に付随して起こる倒置現象である。Culicover (1999)は、譲歩節の省略文中で、疑問詞と前置詞が倒置されることを最初に指摘している。

(4) You should talk to someone, no matter who to. (Culicover 1999: 137)

この倒置は、疑問縮約でのみ許されるため、譲歩節で疑問詞と前置詞の倒置が起きることは、その節省略が疑問縮約であることを示す証拠となる。また、swiping は、Culicover (1999)が示した譲歩節以外にも観察される。以下は、コーパスで検索された not matter と wh-ever 構文の一例である。

(5) a. If you see a girl that is gorgeous, go talk to her. It doesn't matter **what about**. (COCA 2012 BLOG)
b. This drug is wanted bitter bad sir, **whatever for**. (COCA 2008 FIC)
c. Before I die, at least tell me the name of this female person you're engaged to do **whatever with**.

(COCA 1997 FIC)

上記で見た二つの特徴は、譲歩節の節省略が、代名詞主語と繋辞の単純な脱落ではなく、削除の一種である疑問縮約であることを示している。次節では、譲歩節の省略文の内部構造について見ていく。

## 3. 省略部の統語的内部構造

一般的な辞書や文法書等でも、省略された譲歩節に代名詞主語と繋辞があることが指摘されているが、譲歩

節の疑問縮約は、繋辞文に限らない。譲歩節の疑問縮約が繋辞文以外の統語派生をもつことは、付加詞の wh 句から示すことができる。Merchant (2001: 121)と Vicent (2019: 489)は、付加詞の wh 句が縮約された分裂文では許されないことを指摘している。

(6) a. He fixed the car, but I don't know {how/why/when/where} he fixed the car.
b.* He fixed the car, but I don't know {how/why/when/where} it was.

彼らは、(6)の対比に基づき、次の典型的な疑問縮約が分裂文派生ではなく、(6a)に由来していると分析している。

(7) He fixed the car, but I don't know {how/why/when/where}.

同様の議論は、譲歩節にも当てはまる。譲歩節の疑問縮約においても、付加詞の wh 句が残存要素となることがあるが、wh 句の種類によっては、その省略箇所を繋辞文で復元すると非文法的になる。とくに、副詞の how は、繋辞文の軸語（pivot）の位置に生起することができない要素であるため、how を用いた省略文は、その省略箇所が繋辞文に由来していないことを示す証拠となる。

(8) a. We'll find a new home, no matter how. (COCA 2019 MOV)
b.* We'll find a new home, no matter how it is.
c.? We'll find a new home, no matter how we do it.

(9) a. All of us can benefit from doing some form of exercise. It doesn't matter how briefly.
b.* It doesn't matter how briefly it is.
c. It doesn't matter how briefly we do it.

譲歩節の中でも、no matter wh や wh-ever 構文は、省略のない形だと冗長的となることがある。そのために、省略のない(8c)の文の容認度は落ちるが、繋辞文の(8b)/(9b)とそれ以外の派生(8c)/(9c)には対比が観察される。この対比は、譲歩節の省略箇所が繋辞文ではないことを示す一つの証拠である。

## 4. おわりに

本稿では、譲歩節の節省略が疑問縮約であり、その統語派生には、繋辞文以外の基底構造をとり得ることを示した。譲歩節の疑問縮約には、no matter what (happen)といった慣用的な表現もあり、削除に課せられる統語的同一性条件が容易に破られる統語環境である印象があるが、本研究によると、譲歩節の疑問縮約では、省略箇所が必ずしも繋辞文や分裂文であるとは限らないと結論づけられる。

参考文献

Barros, Matthew (2014) *Sluicing and identity in ellipsis*, Doctoral Dissertation, Rutgers University, New Brunswick, NJ.
Culicover, Peter W. (1999) *Syntactic nuts: Hard cases, syntactic theory, and language acquisition*. Oxford University Press, Oxford.
Elliott, Patrick D. and Andrew Murphy (2019) "Unconditional sluicing: An ellipsis identity puzzle," *Snippets* 35, 3-4.
Merchant, Jason (2001) *The Syntax of Silence: Sluicing, Islands, and the Theory of Ellipsis*, Oxford University Press, Oxford.
Vicent, Luis (2019) "Sluicing and its subtypes," *The Oxford Handbook of Ellipsis*, ed. by Jeroen van Craenenbroeck and Tanja Temmerman, 479-503, Oxford University Press, Oxford.

Corpus

Corpus of Contemporary American English

* 本研究は、福島大学学内競争的研究資金(23RK004)の助成を受けている。